

**School of Languages, Cultures and Societies**

CENTRE FOR TRANSLATION STUDIES

**Translation Test**

**Japanese into English**

The following translation tests must be completed by all students who wish to study Specialised Translation modules as part of their Masters or Postgraduate Diploma course. This test is for those students commencingstudies in **September 2024** only.

For information on current course module options please follow the course catalogue weblinks on the MA course webpages.

**Instructions**

1. **Save this document** as an ‘MS Word’ document titled “Ja-En ST Test [FirstName Surname]” (include all three pages of the document).
2. You are free to use any dictionaries and reference material you wish, however, **the work must be entirely your own**.
3. **Upload the document** in the Supporting Information (Personal Statement) section of the online application form via the applicant (or agent) portal.
4. **Complete the declaration** below to declare the translation is your own work.

**I declare that the enclosed translation is entirely my own work.**

|  |  |
| --- | --- |
| **Name:** |  |
| **Signature:** |  |
| **Date:** |  |

**JAPANESE INTO ENGLISH TRANSLATION TEXT**

**記憶ちがい**

**辰野隆**

「久しぶりだな、全く。」  
「久しぶりどころじゃないね、五十年ぶりだもの。」  
　こう云って、声を揃えて笑ったのは、何れも老人で、二人とも今年は算え歳の六十三である。この“久しぶり”という間投詞のような挨拶は、今しがた、二人が会ってから、もう二、三度繰返されていた。午食には既に遅く、夕飯には未だ早い半端な時刻に、二老人は都心に近い賑やかな街の小料理屋で盃を重ねている。  
「先刻、電車の中で、どうして俺だってことが判ったんだい？　こっちはまるで気がつかなかったんだが、向い合って腰をかけているお爺さんから、いきなりＹちゃんじゃないか？　と言われた時に、初めて俺は五十年前の記憶が一時に甦って来たので、Ｎちゃんだったね、と言ったら、君が、やっぱりそうだったか、と言ったね。」  
「俺は俺で、腰を下して向い合った時から、Ｙちゃんだな、とは思ったんだが、腮の左側に見覚えの黒子が無いので、或は間違いではないかとも考えたが、結局思い切って訊いてみたのだ。」  
「黒子は顔を剃る時に邪魔になるので、もう疾うの昔、薬で焼いてしまったよ。ところで、Ｎちゃん、君と判ってから、直ぐに思い出したことがあるんだが。覚えていないかな。俺たちが高等二年の時だった。その頃、尋常二年か三年に、飯田の雪ちゃんという可愛いお嬢ちゃんがいたのを忘れたかい？」  
「覚えているとも、雨の日のことだろう。あれは忘れられないよ。」  
「そうか、そいつは驚いたね。」  
  
　初夏の雨の日だった。休み時間に、運動場で遊べぬ少年少女たちは廊下を駆けまわったり、或はＹやＮのように、廊下の端に腰をかけて、両足をぶらんぶらんさせながら、灰色の空を物足らなそうに眺めたりしていた。Ｙがふと横を向くと、手を延ばせばとどく程の所に、色の白い円い顔の雪ちゃんが、片方の足を折って坐り、片方の足をぶらりと垂れて、これも余念なく、降る雨を眺めていた。  
　その季節に足袋をはいているのは雪ちゃん以外にはなかったので、それがＹにもＮにも何となく異様に思われたのだった。Ｙにはその場の光景が五十年後の今でも、まざまざと浮んで来るのだが、それから先の記憶が少し覚つかない。次の瞬間には、Ｙは雪ちゃんを後から、しっかり抱えていた。Ｎは雪ちゃんの小さな白足袋を手に持っていた。足袋を無理に脱がされた雪ちゃんの左の足の小指が二股に岐れて、桃色の爪が二つ列んでいた。雪ちゃんはしくしく泣いていた。泣きやまなかった。目の前の水溜りの中には、雪ちゃんの草履の赤い鼻緒が濡れて、赤い色が水ににじんでいた。その時、見上げたＮと見おろしたＹの視線がはたと合った。

**JAPANESE INTO ENGLISH TRANSLATION WORK**

[Please enter your translation of the above article here]